

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## アフリカ諸社会における女性の比較研究： 性差の伝統的構造と現代的対応

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 日本学術振興会, Japan Society for the Promotion of Science 公開日: 2017-03-14 キーワード: 作成者: 和田, 正平 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00008394">http://hdl.handle.net/10502/00008394</a>

# アフリカ諸社会における女性の比較研究

—性差の伝統的構造と現代的対応—

和田 正平

## 1. 研究計画の経緯

本年(1995年)3月、コペンハーゲンで開催された国連社会開発サミット(6日~13日)において、貧困撲滅宣言が採択された。地球規模で貧困の問題を取り上げられたのは、今回がはじめてであり、各国首脳が一堂に会した意義は大きい。来年(1996年)、各国が策定し、実施する国内政策で、貧困者の生活がどのように改善に向かうのだろうか。長年、途上国にかかわり、地域的にはアフリカ諸国において極貧にあえぐ人々を目のあたりに調査してきた私たちにとってもまた、国連が提唱するより豊かな社会の実現をめざす開発戦略の策定は、重大な関心事であり、開発人類学のテーマとも深いかかわりをもっている。

実際、本研究は最初、1984年の大旱魃を経験したあと、アフリカ諸国のあいだに起こった飢えと貧困を克服しようとする社会開発の動きに呼応して計画された。とりわけ、1985年、ナイロビで開催された「世界婦人会議、国連婦人の10年」を契機に、開発における女性の役割がきわめて重要視されてきたことが、本研究を発足させる主要な動機になっている。それまで、各国政府や国際援助機関は女性の力をほとんど評価していなかった。近代産業社会では、男性が生産者であり、女性の労働は男性支配の陰に成立する「シャドー・ワーク」として位置づけられていたにすぎず、社会の表舞台に出なかったからである。

しかし、最近では女性学や女性史などの女性を研究対象とする学問ジャンルが発達し、女性の労働量を正当に評価する試みが各研究機関でおこなわれ、たとえば、農業部門に関していえば世界の食

糧生産の半分以上が女性の手によるもので、アフリカではそれが8割に達する地域さえあると『ニューズ・ウィーク』(1992・3)等に公表された。そこで、途上国においてはもはや女性の参加を抜きにして開発問題を考えることは現実的でなく、むしろ積極的に支援すべきだという意見が関係諸機関等で強くなってきた。女性のほうもまた、開発のために団結し、組織づくりを開始した。そうした女性たちを対象に資金を援助するため、1987年、国連婦人開発基金も設立された。アフリカの女性たちは、飢えと貧困のなかから力強く立ち上がろうとしているのである。

だが、国や民族によって、男女の性差が厳しく、両者の活動領域が区分され、それが女性の社会参加をはばむ障害になっている面も否定できない。そこで本研究は、アフリカの女性たちが性差の伝統的な構造をこえて積極的に生産に参加し、現代の社会開発の要請にいかに対応しているか。その実状と問題点を明らかにしようとして計画されたものである。

## 2. 研究組織

平成4年度より、平成6年までの3か年間文部省科学研究費補助金を受けて実施された海外学術調査の組織の概要は、以下のとおりである。

代表者

和田 正平 国立民族学博物館 教授

分担者

端 信行 国立民族学博物館 教授

江口 一久 国立民族学博物館 教授

小川 了 京都精華大学 教授

小馬 徹 神奈川大学 教授

栗田 和明	立教大学 助教授
阿久津昌三	信州大学 助教授
吉田 憲司	国立民族学博物館 助教授
研究協力者	
茨木 透	東京都立大学 大学院生
片上 英俊	東京都立大学 大学院生
S.B.パイアス	カメルーン人文科学研究所 分館長
B.イタンダーラ	ダル・エス・サラーム大学 専任講師

### 3. 調査対象国（民族）

タンザニア（イラク、ニャキウサ、ザラモ）  
 ケニア（キプシギス、タベタ）  
 カメルーン（フルベ、ティカール）  
 ザンビア（チェワ、ウンゴニ）  
 ガーナ（アシャンティ）  
 コートジボアール（アジュクル）  
 セネガル（セレール）

### 4. 調査経過

独立後のアフリカ諸国では、伝統的な結社も存続したが、国家建設、民族自立の新しい社会変化に対応して、1970年代より多種多様な新結社が都市あるいは各地方に誕生し、そのなかには女性だけの互助組織として発達したものも少なくない。本調査のもっとも中心的な具体的な調査対象は、現代に対応した女性の団体や組織についてである。

〈平成4年度〉

1) タンザニア南部、ニャキウサ農村社会では、栗田が、女性が講集団をつくり、トラックをチャーターして農産物を都市の市場まで運搬、販売する経済活動について調査を進めることができた。こうして女性が営利を目的に団体を結成し、市場経済に参入する諸活動は、女性がまた民族の境界を越えて国家の経済システムのなかに組み込まれていく過程としてとらえることができる。

2) しかしまた、反面、タンザニア北部ではロテア地区とムブルムブル地区に住むイラク女性約150人が「カンビ・ヤ・シンバ（ライオンの小屋）」

にある聖なる広場に集合し、一週間雨乞い儀礼をおこなったことが和田によって調査されている。この事例は依然として伝統的な女性結社が健在であることを示しているが、注目すべきことは、この集会在同時にタンザニアの女性が現在直面している社会問題の討論の場にもなっていることである。

3) 同様のことは、ザンビア東部、チェワ社会の女性の成人儀礼チナムワリにおける女性の集会にも見られ、吉田の調査によると、この儀礼自体は男性だけで構成される仮面結社ニャウとの構造的な関係において成立するものであるが、近年は、そのネットワークが社会開発の討論の場にもなっており、現代的な必要に応じて機能が変化していることがうかがえる。

4) 西アフリカに存在した旧王国のうち、今回調査対象になったアシャンティ王国では、王母（クィーン・マザー）が主催する評議会が、親族、結婚、市場の紛争などの「家政的なもの」を取りあつかい、王が主催する「国家的なもの」をあつかう評議会と区別され、「男性の領域」に対応して「女性の領域」を形成しているといわれてきたが、阿久津の調査によると、実は、王母は王位継承を決定するとともに王権の篡奪をくわだてたりする蔭の実力者であり、アシャンティ女性の意志を統一する政治的シンボルとして機能していることも明らかになってきた。もし自分たちの政治的意志を表明したいときは、王母を先頭にして「戦争歌」を歌いながら町中を示威行進する強硬手段に訴える事実も観察されている。このように、女性の政治的進出の基盤に王母を頂点とする宮廷組織が深く関与していることが、今回の調査によって裏付けられたのである。

〈平成5年度〉

1) 次いで女性の団結にとって重要な組織的基盤になっているのがキリスト教会である。ザンビアでは吉田が精霊憑依の信仰に関係する基礎的な情報収集にあたった。この宗派がチェワ社会に浸透していく過程を調査したところによると、布教における女性の役割が大きく、さらに国境を越えてこの宗教が拡大していくのも、多くは女性間の人的ネットワークによっていることが明らかになった。

2) ケニアにおいては、報告数が少ない少数民族のタベタ(ケニア人口の0.07%)の女性の生活に関して、片上が調査をおこなった。タベタにおいても、女性がキリスト教の布教の担い手であり、教会をとおして生活改善運動を推進している事例が観察された。また、ペーレ族においては、キリスト教徒の会合とは一応別個に婦人会が設立され、活動の一環としてメンバーの経済的支援を目的とした「茶会」が隔週開かれている。その場において、会員から寄付金が集められ、女性に対する相互扶助がおこなわれている。

3) カレンジン系キブシギス社会においては、各家のあいだの等量労働交換を目的とする伝統的な女性組織「モリック」のほかに、ケニア政府の指導監督下にある「マエンデレオ・ヤ・ワナワケ(女性の前進)」と呼ばれる女性の自助組合活動もまた盛んにおこなわれている。この地方において、現地調査をおこなった小馬によると、こうした自助組合の共同耕作によってたくわえた資金を元手にして、学校や教会の事業を積極的に援助し、女性たちが社会的地位を高めつつあるという。しかもそれに際して、女性たちは男性若年層ならびにキリスト教会と手を組んで、伝統的な「長老支配」を突き崩す状況も生まれつつある。

4) セネガルでは、首都ダカールにおいて、小川がインフォーマル・セクターでの経済活動に従事するセレール女性を中心に調査をおこなった。このセクターで働く女性は、社会の最底辺で生活している者が多いが、彼女たちは同業者あるいは地域住民同士で「トンチン」という頼母子講をつくり、都市での相互扶助および新しい形の連帯組織を形成しつつある。

5) カメルーン北部、マルワの都市居住フルベについて江口が調査をおこなった。フルベ社会ではイスラム教の影響で、女性の社会的な立場は低いものとされ、仕事も禁じられている。しかし、実際には、自活している女性も少なくなく、昔話のなかにも女性の力をたたえるものもある。独立後はフルベの生活も多面的になり、男女の地位と役割の関係も額面どおりに区分けできなくなっている。

〈平成6年度〉

1) カメルーン北西部州では、端が州都バメン



写真1 セネガル国ファティック州ニャハール村。セレール族の女性たちが自分たちが抱えている様々な問題を話し合い、解決策を模索している。(1988年、三島禎子撮影)



写真2 ザンビア国東部州ムロロ村、ズィオン聖霊教会の礼拝風景。参加者の大多数は女性で占められている。(1994年、吉田憲司撮影)

ダから離れたいくつかの村で調査をおこない、都市化、貨幣経済化の浸透のなかでの性による役割分担の変化を示した。男性のグループは、稲作農民組合を形成して水田耕作を拡大している。一方、伝統的な自給的農業の担い手であった女性もグループで土地を購入し、換金性の高い作物を栽培して貨幣経済に積極的にいかかわっていく動きを見せている。男女それぞれが新しい社会経済的なニッチェを生み出している傾向が明らかになった。

2) セネガルのダカールで、小川は都市に住む人々の経済活動を調査した。インフォーマル・セクターにおける女性の活動が平成5年度から指摘されていたが、平成6年度は全体像の記載の必要から男性も含めたインフォーマル経済従事者たち

の活動状況にまで対象を広げて調査した。これらの経済活動と都市民の互助組織とがセネガル国全体の経済的発展と密接な関連があることが今回指摘できた。

3) ザンビア国ではチェワ社会とンゴニ社会での儀礼における性差に注目して、平成5年度に引き続き吉田が調査をおこなった。その結果、父系社会であるンゴニ社会から母系社会であるチェワ社会へ聖霊信仰が導入され、その時点で信仰の主たる担い手が男性から女性へと変化したことがわかった。また、その信仰がチェワ社会の伝統的な儀礼組織の欠如を埋め、それを補完する形で浸透してきていることを示した。

4) コートジボアール国ダブ郡で、茨木はアジュクル女性の活動に注目した。最近の都市部での人口急増によってキャッサバを加工した食品、アチュケの需要が高まっている。アジュクルの女性はこの食品を加工生産する作業に深くかかわるようになり、その結果、農作業や日常生活上の性別の分業に変化が見られるようになった。

## 5. 共同研究会

ところで、アフリカには、わが国が承認している国だけでも53(1994年現在)もあり、民族ともなると、1,000以上ともいわれ、定義の如何によってはもっと数がふえる可能性さえある。それゆえ、今回、現地調査をおこなった国(7か国)も、民族(12民族)も、数的には全く不十分で、九牛の一毛に過ぎず、さらに関連データや情報などを収集し、現地調査を補充することが必要である。

そこで、研究代表者は、平成3年度より発足していた国立民族学博物館の共同研究「アフリカ社会における性差の伝統的構造と近代化」とゆるやかな連携をもって現地調査における研究の充実と展開をはかった。その現地調査者の参加のもとに、合同しておこなわれた「共同研究会」における研究発表は、以下のとおりである。

<平成3年度>

91. 6. 29 「タンザニア・ウジジのswヒリ女性」  
日野舜也  
「女性と身体性—象牙海岸のダン族の事例」  
真島一郎

11. 2 「バムン王制社会における女性の地位  
～3 と役割」  
和崎春日  
「グシィの女性と離婚訴訟」

松園万亀雄

「アフリカ女性の民族学的研究の動向」

和田正平

92. 3. 19 「Agni 人の成女儀礼について」

白井和子

「北アフリカの女性研究の現状と課題」

宮地美江子

<平成4年度>

92. 6. 26 「男性優位社会における出来事と言説—パリ・アニュアの事例から」

栗本英世

「北ケニア遊牧民社会における性差の  
伝統と抑圧の回避」

佐藤 俊

11. 19 「民族生殖理論と性—ケニア・チャム  
スの事例」

河合香吏

「ソニンケ族における女性の位置—伝  
統と近代化のはざままで」

カトリーヌ・キミナリ

93. 3. 16 「仮面結社と成女儀礼—ザンビア・  
チェワの事例から」

吉田憲司

「狩猟採集社会の男と女」

寺嶋秀明

<平成5年度>

93. 11. 5 「コンゴ北東部の狩猟採集民アカの性  
と摂食回避」

竹内 潔

「イスラムにおける女性問題—女性差別  
撤廃条約とナワル・エル・サーダ  
ウィ」

戸田真紀子

94. 3. 29 「ザンジバル女性文化へのアプロ  
～30 チ」

富永智津子

「たたかう男・豊饒の女—漁民社会の  
性差と世界観」

竹沢尚一郎

「都市女性の連帯組織—セネガルの場  
合」

小川 了

以上、「共同研究会」と「海外学術研究」の成果を合同で取りまとめて、目下『アフリカ女性の民族誌』(仮題)明石書店刊として出版計画が進行中である。

## 6. 総括

以上3年間の調査研究の成果を総括すると次のとおりである。

1) 本研究全体の主題は、女性、伝統と変化、にかかわるものであったが、これらは研究対象となったそれぞれの民族社会の理解を進める上で大きな意味をもつ問題であり、それぞれ有効な記述と観点を引き出すことができた。したがって、女性と変化を主題に研究する視点は、多くの社会にあてはまる普遍性を持ち、これからの文化人類学研究の分野として重要であることが示唆される。

2) とくに変化を踏まえての記述は、多くの場面で有効であった。フェミニズム人類学やマルキズム文化論の影響下の人類学では十分に示すことができなかつた、「現在起こっている社会の変化に柔軟に対応していく両性の役割」という研究視点を提供することができた。

3) 本研究によって提供された、女性の文化人類学に向けての研究視点として、具体的には以下のようなものを挙げるができる。それは、都市の中での女性の経済活動、都市と農村との関係で農村女性が果たす役割、農村女性の生活改善運動、他民族やキリスト教との接触による女性の役割の変化、両性の役割のノルムと実際、などである。とくに現在では国際的な経済活動、開発と援助の影響の下で大きな変化と対応を示している女性の諸活動に注目する研究視点が重要であると示唆された。

和田 正平 (わだ・しょうへい, 1937年生)  
 国立民族学博物館第3研究部 教授。北海道大学  
 大学院修士課程修了。文学修士。  
 研究課題：社会人類学／アフリカ地域研究／社会変動論。

文部省科研費・国際学術研究 (学術調査)  
 課題番号：0404116

### ▶▶▶ 文部省科研費・重点領域研究シンポジウム案内

#### 音声・言語・概念の統合的処理による対話の理解と生成に関する研究

◇日時：平成7年11月17日(金) 9:30~17:00

◇場所：弥生会館2階「大和」  
 東京都文京区根津2-1-14

#### ◇プログラム

▷ Victor W. Zue (MIT) : Spoken Dialogue Systems for Human-Computer Interactions : Achievements and Challenges

▷ 中津良平 (ATR 知能映像通信研) : マルチメディア技術とコミュニケーション

▷ 中川聖一 (豊橋技大) : 音声対話システム—頑健

な音声認識・理解手法—

▷ 丸山直子 (東女大) : 話しことばの諸相

パネル「マルチモーダルコミュニケーション  
 における音声対話」

◇主催：重点領域研究「音声対話」総括班

◇照会先：〒606-01 京都市左京区吉田本町  
 京都大学工学部情報工学教室  
 (堂下修司)

電話 075-753-5976